

レポート・高雄満喫！フルーツ狩りと日台交流サミットツアー

旬の台湾フルーツを堪能し日台交流

本会理事・青年部長

加藤 秀彦
かとう ひでひこ

七月六日から八日まで、本会青年部主催により「高雄満喫！フルーツ狩りと日台交流サミットツアー」を実施しました。

このツアー開催に当たっては高雄市政府農業局に全面協力していただき、一般観光ではまず訪れることができない農家を訪ね、マンゴーなど旬のフルーツ狩りをしました。また七日には、高雄展覽館で開催された「日台交流サミット」にも参加しました。

旬の南国フルーツを堪能

七月の台湾のフルーツと言えば何と云ってもマンゴー！一行はまず高雄市旗山区の農家を訪れました。ここでは主にグアバ（芭樂。和名は蕃石榴^{ばんざいぐろ}）

やマンゴーを栽培しています。

農場に足を踏み入れると、一面グアバ畑が広がっています。勧められるままに奥へ入ってゆくと、農家の皆さんが採れたてのグアバを切って待っていてくださいました。「日本からよく来ましたね。さあ、食べて食べて」とフルーツを振る舞ってくれます。ある参加者は「台北の一流ホテルで食べたフルーツより美味しい！」と感激していました。

台湾でグアバを食べたことがある人は少なくないと思いますが、このグアバは町で食べたものとは全然違います。採れたてのグアバは瑞々しいだけでなく、優しい甘みとほのかな香りがしています。ここまで上品な味わいを

楽しめるのは産地だけです。

続いて、農家のオーナーが農園を案内してくれました。グアバやマンゴーの他にバナナ、ドラゴンフルーツ、パイナップルなどがあります。南国フルーツ好きには夢のような場所です。

これらのフルーツは単に市場に出荷するだけでなく、実験栽培も兼ねているそうです。例えば、ドラゴンフルーツを収穫した土でマンゴーを栽培すると生育状況はどうなるかなど、果物の相性を調べています。このような農家



一般観光では訪れることができない農家で夢のような果物狩り（高雄・旗山区）

の地道な努力によって台湾の農業が支えられているのです。

農園の取り組みが分かったところで、いよいよマンゴー狩りです。マンゴーは木に成ったまま虫除けの袋に包まれています。袋の上から触って大きさを探り、大きなマンゴーを求めて農園を分け入ります。

マンゴーの実は少しひねると簡単に収穫できます。そして甘い香りの蜜が溢れ出てきます。自分で収穫した喜びとマンゴーの甘い香りで夢見心地にな



採れたてのマンゴーを日本に持ち帰るためジャムに加工
(高雄・旗山区)

った参加者もいました。

ところで、収穫したマンゴーをどうやって日本へ持ち帰ったか不思議に思う方もいるのではないでしょうか。

台湾から日本へ果物を持ち出すには植物検疫が必要で、一般旅行者は日本へ果物を持ち帰れないのです。もし鞆の中にあるのを係官が発見したら、没収されます。

その問題は農園の次に訪れる場所でも解決します。マンゴー狩りした後、一行は農園近くにある障害者支援施設に向かいました。ここの調理施設をお借りして、先ほど収穫したマンゴーを自分たちでジャムや芒果青（マンゴー漬け）に調理します。参加者が一緒にな

って作業するので、自然と会話も弾み親しくなります。

この取り組みは政策としてもよく考えられていて、外国人を農園がある地方へ足を運ばせるだけでなく、障害者支援施設の仕事を創出しています。まさに農業、福祉、観光が一体となった

面白い取り組みです。

このように、ここで調理することにより、マンゴーを日本へ持って帰れるようになるのです。台湾から日本へ持ち込みが禁止されているのは生の果物ですから、調理・加工された果物は日本へ持ち込めます。

日台交流サミットでの得難い経験

フルーツ狩りを堪能した後は、日台交流サミットへ参加しました。

このサミットは全国日台友好議員協議会（以下、協議会）主催で毎年開催されていて、第一回から第三回までは日本で開催しました。そして、第三回熊本大会の折に康裕成・高雄市議会議長が「次回はぜひ高雄で！」と熱い気持ちでPRしたので、初めての台湾開催となる高雄大会が実現しました。

協議会の藤田和秀会長、岩本たかひろ事務局長（共に名古屋市長議員）が事前折衝で何度も高雄を訪問し、現在は総統府秘書長（官房長官）の陳菊・



日台交流サミットには頼清徳・行政院長や陳菊・総統府秘書長など錚々たる台湾要人が登壇

高雄市長の協力を取り付けました。そのため、頼清徳・行政院長（首相）、陳菊・総統府秘書長、謝長廷・台北駐日経済文化代表処代表（駐日大使）、邱義仁・台湾日本関係協会会長という豪華な顔ぶれが登壇しました。この登壇者からも、台湾が対日交流に力を入れていることが見て取れます。

主な参加者は日台交流に関わる地方議員で、日本からは四十二議会三百二十三人（うち議長十二人）が、台湾からは二十二議会百十八人の地方議員が

「善の循環」の形成

助け合いの事例

- ・1999台湾中部大地震
- ・2011東日本大地震
- ・2014高雄ガス爆発事故(高雄氣爆事故)
- ・20160206台南大地震
- ・20160414熊本大地震
- ・2018花蓮地震



大災害のたびに日台が助け合ってきた「善意の循環」が次世代日台交流のカギ

参加。本会青年部は、日本から唯一の民間交流団体として参加しました。

最近、台湾と断交する国が増え、台湾外交がマイナス評価されることがあります。しかし地方議員とは言え、これだけの政治家が集まり、日本と台湾の間に新しい政治チャンネルが生まれ、たことは、台湾外交にとって大きなプラスと言えるでしょう。

台湾側登壇者は、日本と台湾の間に「善の循環」が形成されたと強調していました。一九九九年の台湾中部大地

震（921大地震）、二〇一一年の東日本大震災、二〇一四年の高雄ガス爆発事故、二〇一六年の台南大地震、同年の熊本大地震、二〇一八年の花蓮地震など、日本でも台湾でも大きな災害が起こり、日本と台湾はお互いに助け合ってきましたが、この「善意」が次世代の日台交流のカギになるのです。

サミット後の晩餐会には、数百人が一同に集まりました。国賓大飯店のシェフが腕を振るった料理はもちろん、日本と台湾の全土から集まった日台交流に関わる人々との情報交換や交流は他に得がたい経験になりました。

翌日、「自由時報」紙にサミットの記事が掲載されました。それと同じ紙面に「一日農夫結縁 高峰會日代表再度走訪」というタイトルで、本会のフルツ狩りツアーが紹介されました。政治の固い話題からフルツ狩りまで掲載されたこの紙面は、日本と台湾が非常に幅広く交流していることを雄弁に語っているようでした。